

『壊れかけた花瓶がひとつ』作・玉井秀和

暗闇

スマホがつく。エロ動画を見ている男・マサヒロ。

暗闇の中に、動画の音と、男の呼吸音が響く。

マサヒロ「あ、やばい。あ、あ、ちよつとまって、まだ駄目、ああ！」

無常に響く、動画の音声。

マサヒロ「ダメだあ。いけると思っただけどなあ今日は」

徐々に明るくなっていく。

まだ動画は流れている。

マサヒロ「やっぱ、持続力がな、弱いなだよな。金玉ないからかな。たぶんそうだよな。金玉ないから強い状態が続かないんだよな」

そんなところに電話が鳴る。彼女・エイコからのようだ。

動画との関係で、マサヒロは焦るが、どうにか動画を処理し、電話に出る。

マサヒロ「はいはい。いや、もう起きたけど。うんさすがに。え今？筋トレ筋トレ。ほんとだつて。金を鍛えてたんだつて。いや、こういうのはすぐ結果が出るようなもんじゃなから。継続だよ継続。うん、そうそう。2か月くらいじゃない？知らないけど。エイコは何やってんの。えなにそれ。あ、友達との奴は終わったんだ。あそう。あじゃあもう帰ってくんの？もうちよい書かんのね。はいはい。うん。え、何？今日親父さんくんの？ここに？ちよつと、あさいつてよ。何時？え、もうくんじゃん。いや、そんなん誤差だろ。片付けとかは？あじゃあ、ざつとしとく。うん。エイコ帰ってくるまで適当にしとけばいいのね。もう帰ってくんのね。わかつたはーい。早くしてね。はい。じゃ」

マサヒロ、急いで着替えとか、片付けとかをしだす。

テンションを上げるために音楽なんかを流してもよい。

マサヒロ「(歌う)」

チャイム

親父さんが来たのだから。

マサヒロ「は、はーい」

親父・声「エイコちゃん。パパだよ。パパッと出てきてよ」

マサヒロ「あ、はい。今行きます。あ、どうも」

親父・声「あ、マサヒロ君。あれエイコは？」

マサヒロ「あのさっきまで友達とごはんかなんか行ってたらしくて、で、今帰ってきてるらしいです。すぐ帰ってくるみたいなんです」

親父「あ、そうなんだ。中で待ってもいい？」

マサヒロ「あそれは、全然全然」

親父「じゃあ、失礼しちゃって」

マサヒロ「すみません。ちよっと散らかっちゃってるんですけど」

親父「ああ、いいいいいよ」

マサヒロ「ウーロン茶しかないんですけどいいですか？」

親父「うん。じゃあホットで」

マサヒロ「、ホット」

親父「冗談冗談」

マサヒロ「ああ」

マサヒロ、お茶を次ぐ。

親父「マサヒロ君は今何してんだっけ」

マサヒロ「あ、フリーターです」

親父「あ、そうだっけ。まあ、それはそれで大変だよね」

マサヒロ「まあ、あ、どうぞ」

親父「ああ、ありがとう。あれ？音楽やってなかったっけ。やめたの？」

マサヒロ「あいや、まだやってるんですけど、そんな全然あれで」

親父「ああ、まあね、大変だもんね」

マサヒロ「たまに仕事入るようになったんですけど」

親父「え、あ、そうなの。すごいじゃん」

マサヒロ「いやでも仕事って言っても、友達の結婚式の、なんていうんすか、その、オリ

ジナルソングとか、そういうのを作ってみたいんですけど」

親父「いや、それでもすごいですよ」

マサヒロ「まあ、でもそれだけじゃあれなんで」

親父「まあ、そうだよな」

マサヒロ「すみません」

親父「いやいいいいいよ。あ、そうだ」

お土産を取り出す、親父。

親父「大したもんじゃないんだけど」

マサヒロ「あ、なんかすみません。気使わせちゃって」

親父「いいのいいの。というよりマナーだから。社会人のマナーだから。こうやってつまらないんですけどとかやって。で、ほんとそこそこ自信のある品なのね」

マサヒロ「だいたいお菓子とかタオルとかってかんじありますけど」

親父「まあ、普通はね」

マサヒロ「親父さんの何なんですか？」

親父「まあ、それは開けてみてからだよね」

マサヒロ「あじやあ、ふつうの感じじゃないんですか」  
親父「まあ、そういうのは開けてみてからだよね」  
マサヒロ「開けちゃってもいいですか？」  
親父「いやいやいやいや。それはあれだよ。エイコが帰ってきてからだよね」  
マサヒロ「ああ。すみません」  
親父「まあね。さすがにね。マンモス」  
マサヒロ「え？」  
親父「ん〜マンモス」  
マサヒロ「え、何やってんすか？」  
親父「え、知らない？ん〜マンモス」  
マサヒロ「なんすかそれ」  
親父「昔はやったんだけどな」  
マサヒロ「マンダムなら知ってますけど」  
親父「ああ、それもあつたよね」  
マサヒロ「マンモスは知らないです」  
親父「こうやってね、ん〜マンモス。こうやんの。ここの形が重要」  
マサヒロ「あ、型があるんですね」  
親父「そうね。歌舞伎とかといっしょ。全部型だから」  
マサヒロ「どういうときにやるんですか？」  
親父「基本はうれしい時だね。こう、言葉では表現できないような、グツとくるものがあったらやるの。基本はね」  
マサヒロ「基本ってことは応用があるんですか？」  
親父「俺くらの使い手になると、喜怒哀楽表現できるよね」  
マサヒロ「えあ、そうなんすね」  
親父「もっと高ぶっちゃったらパオ〜ンっていうの」  
マサヒロ「ぱお〜ん、」  
親父「そうそう。パオ〜ン。パオ〜ン」  
マサヒロ「でもそれ象ですよ。マンモスじゃなくないっすか？」  
親父「象がパオ〜ンっていうならマンモスもパオ〜ンだろ」  
マサヒロ「そうなんすかね」  
親父「そりやそうだよ。自然の摂理だよ」  
マサヒロ「そうかもしれないっすね」  
親父「ほら、やってみて」  
マサヒロ「ええ？」  
親父「パオ〜ンって」  
マサヒロ「いやですよ」  
親父「いいからいいから」  
マサヒロ「いやですって」  
親父「ほら」

マサヒロ、嫌々。

マサヒロ「パオゥン。こうすか？」

親父「もつと全力で」

マサヒロ「パオゥン」

親父「繰り返してえっ」

マサヒロ「パオゥン」

マサヒロ、何回かやっている。なんか、楽しくなってくる。

その間に、親父はものすごくまじめな顔になっている。

親父「マサヒロ君さあ」

マサヒロ「はい」

親父「金玉ないんだよね」

マサヒロ「え」

親父「金玉。あ、辜丸、辜丸」

マサヒロ「え、あ、」

親父「ないんだよね」

マサヒロ「はい」

親父「マサヒロ君が悪いってわけじゃないんだけどね。いや本当にこれだけは誤解しないでほしいんだけど、マサヒロ君が悪いわけじゃないのね」

マサヒロ「はい」

親父「でさ、あの、エイコと別れてくれないかな」

マサヒロ「え」

親父「いや、ホント、マサヒロ君は悪くないんだけどさ、おじさんもさ、なんていうのかな、もうこんな歳なわけだからさ、ほら、孫の顔がね見てみたいなー、なんて思ったりしちゃうわけよ」

マサヒロ「えでもそれは」

親父「でね。でね。その、こんな言い方するとあれだけど、金玉がないってことはさ、底の部分がどうしようもないってことなんですよ。だからさ、マサヒロ君、ごめん」

マサヒロ「いやでもそれは」

親父「おじさんだってこんなこと言いたくないよお。でもさ、でもさ、分かってよ。おじさんだって頑張ってきたのね。そりゃそんなにはお金ないけどさ、俺なりにっていうか、俺なりに、頑張ってきたのね。一生懸命。だからさ、お願い。この通りだから」

マサヒロ「ちよつとやめてくださいよ親父さん」

親父「この通りだから」

マサヒロ「そういうあれじゃないんで」

親父「いくらだ。いくらでいい？好きなかだけ言ってごらんなさい」

マサヒロ「そういうあれじゃないですよ」

親父「何がほしい？何でも言ってごらん。あげれるものだったら頑張るから」

マサヒロ「いや俺だって金玉ほしっすよ」

親父「俺だってあげたいよお！」

マサヒロ「え」

親父「俺だってねえ、こんなもうね、しわっしわだけどしわっしわだけど、かるうじて使

えるかもしれない金玉、あげれるならあげたいよ。もう使い道ないしね。こんなぶらぶら股間からぶら下げてるくらいだったら、今どきのいいワカモンにあげたいよお」

マサヒロ「親父さん」

親父「わかった。あげるわ。あげる」

マサヒロ「えなにいったん」

親父「今ここであげるから、な？」

親父、脱ぎだす。

マサヒロ「ちょっと何やってんすか、意味わかんないっすよ」

親父「せめてもの、せめてものあれだと思って受け取ってくれ」

マサヒロ「いや、ちょっとやめてくださいって」

親父「しわしわだけど、しわしわだけど受け取ってな」

マサヒロ「いいっすいいっす、やっぱいいっす」

エイコ「ただいまー」

エイコ、帰ってくる。

エイコ「何やってんの」

親父「エイコ、今、そういうあれじゃないからあっち行ってなさい」

エイコ「えなに言ってるんの気持ち悪い気持ち悪い。なにやってたのマサ君」

マサヒロ「いや、あの」

エイコ「え、どうしたの」

親父「エイコ。ちょっと外出てなさい」

エイコ「お父さんが外行ってよ」

親父「え」

エイコ「ちよつとマサ君と話したいことあるし」

マサヒロ「え」

エイコ「あ、じゃあそのコンビニでジュース買ってきて。ほら」

親父「じゃあいつてくるけど。マサヒロ君。頼んだよ」

マサヒロ「、、、、」

親父、出ていく。

エイコ「え？なんかあったの？」

マサヒロ「いや」

エイコ「え、暗っ。なんか言われたの」

マサヒロ「いや、、、、あのさ」

エイコ「ん、何？」

マサヒロ「あのさ、えつと、あの、、、、」

エイコ「なに？」

マサヒロ「あの、わ」  
エイコ「あ、そうだ」  
マサヒロ「えちよつと」  
エイコ「お土産買ってきたよ」  
マサヒロ「いやちよつと待ってよ。話さなきゃいけないことがあって」  
エイコ「まあちよつと開けてみてよ。伊勢丹」  
マサヒロ「そうじゃなくてさ」  
エイコ「はやくはやく」

マサヒロ、お土産をあける。  
尊い音がするボールが2つ入っている。

エイコ「セールだったら金玉、2つ買ってきちゃった」  
マサヒロ「金玉？」  
エイコ「そうそう、クリアランスの最終日でさ、すっごい安かったの」  
マサヒロ「え？え？」  
エイコ「最近そんなの売ってるんだね、知らなかった」  
マサヒロ「え、金玉？」  
エイコ「そうそう。セールだったの8割引き。かごにいっぱい入っててさ。けっこおうとるの大変だったんだから、周りにおばさんたちがグチャャって」  
マサヒロ「え、金玉？」  
エイコ「そうだって、あ色そろってないけどいい？」  
マサヒロ「えなに、種類あるの」  
エイコ「うん。イエローゴールドとか、ピンクゴールドとか、あとはシルバーとか、なんかマリンブルーっていうのもあったよ」  
マサヒロ「そんなカラーバリエーションあるんだ」  
エイコ「ね、金色だけだと思ってた」  
マサヒロ「え、伊勢丹で？」  
エイコ「そうそう8割引き。もとは結構いいやつらしいよ」  
マサヒロ「あ、ホントだ日本製って書いてある」  
エイコ「じゃあ安心だね」  
マサヒロ「どこで作ってんだろこんなの」  
エイコ「どこだろうね、埼玉とかじゃない？」  
マサヒロ「なんで」  
エイコ「え、わかんない。ねえ。振ってみてよ」  
マサヒロ「ええ？」  
エイコ「ほら」

マサヒロ、振る。  
尊い音が鳴る。

マサヒロ「すげえ」

エイコ「いい音色」  
マサヒロ「この音は埼玉じゃないね」  
エイコ「えじゃあどこ？」  
マサヒロ「なんか、京都とかだろ」  
エイコ「なんで」  
マサヒロ「なんか、尊いだろ」  
エイコ「確かにね。あり得るかも」  
マサヒロ「そうだよ。絶対」  
エイコ「つけてみてよ」  
マサヒロ「いま？」  
エイコ「いま」  
マサヒロ「恥ずかしいよ」  
エイコ「いいじゃん誰もいないんだし」  
マサヒロ「ええ？」

マサヒロ、恥ずかしがりながらつける。

マサヒロ「どう、かな」  
エイコ「似合ってる似合ってる」  
マサヒロ「本当？」  
エイコ「あーでもマリンプルーとかのほうがよかったかなあ」  
マサヒロ「えいいよこの色で。なんかメタリックでかっこいいじゃん」  
エイコ「そう？」  
マサヒロ「うん」  
エイコ「じゃあ、よかった」  
マサヒロ「うん。ありがとう」  
エイコ「べつにー」  
マサヒロ「なんだよそれ」

二人、じゃれる。

親父、帰ってくる。

親父「ただいまー。カルピスでよかった」  
エイコ「あ、お帰り」  
親父「何々、仲良しじゃない」  
マサヒロ「親父さん」  
親父「ん？」  
マサヒロ「これ」  
親父「なに？」  
マサヒロ「っこれ。金玉」  
親父「え」  
マサヒロ「エイコが買ってきてくれたんです」

エイコ「セールだったから」

親父「え？それ？」

マサヒロ「そうっす。俺の、俺の金玉です」

親父「え、何？いまそんなんうってんの」

エイコ「私も初めて知った」

親父「えなに。色違いじゃん」

マサヒロ「そうなんすよ」

エイコ「それしかなかったの」

親父「メタリックでかっこいいじゃん」

エイコ「同じこと言ってる」

親父「ちよつとふつてみてよ」

エイコ「ええ？」

親父「ほら、ふつてみてよ」

マサヒロ「はい」

マサヒロ、ふる。尊い音が鳴る。

親父「いい音だな」

親父、涙が出てくる。

親父「いい音だ。ごめんなマサヒロ君」

マサヒロ「いいんすよ親父さん。親父さんは何も悪くないっすよ」

エイコ「何が？」

親父「男同士の話に、女が口をだしちゃあいけねえ」

エイコ「何言ってるの」

親父「いい音だった。ありがとう」

マサヒロ「はい」

親父「じゃ、おじさんは帰ろっかな」

エイコ「え、全然喋ってないじゃん」

親父「大丈夫大丈夫。また来るから」

エイコ「えー」

マサヒロ「そうっすよ。もつといたらいいのに」

親父「ほら、母ちゃんに怒られちゃうから」

エイコ「私から連絡するからさ」

親父「エイコは怒られなくつても、お父さん怒られちゃうんだから」

エイコ「えー」

親父「また今度な」

エイコ「またきてね」

親父「すぐくるすぐくる」

エイコ「それはそれであれだけど」

親父「じゃあ、マサヒロ君」



マサヒロ「はい」

親父「んゝマンモス！」

マサヒロ「マンモス！」

エイコ「え、なにそれ、ダサ」

マサヒロ「女にはわかんねえよ」

親父「じゃあね」

親父、去る。

残るマサヒロ。

エイコ「ホントにまた来てよ」

親父「そんな言わなくてもすぐなんだからエイコが帰ってきたらいいじゃない」

エイコ「まあ、たまにね」

親父「うん。じゃあまた」

エイコ「じゃあね。気を付けてね」

扉がしまる。

マサヒロ「パオゥン。パオゥン」

エイコ、帰ってくる。

エイコ「ええ、何やってんの？」

マサヒロ「パオゥン。パオゥン」

エイコ「壊れちゃったあ。えーこわいこわい」

マサヒロ「なんでもねえよ」

エイコ「なにそれ」

エイコ、親父の残していったお土産を見つける。

エイコ「なにこれ」

マサヒロ「あ、親父さんが」

エイコ「あけていいの」

マサヒロ「いいんじゃない？」

エイコ、開ける。

エイコ「うわ、アイスだ」

マサヒロ「えなんぞ」

エイコ「冷凍庫入れといてよ」

マサヒロ「えだつて、親父さんが開けるのはエイコが帰ってきてからだつて」

エイコ「べちゃべちゃだん」

マサヒロ「ええ」  
エイコ「もう」

二人、アイスの処理をする。

エイコ「こういうところあるんだよね」  
マサヒロ「親父さん？」

エイコ「そうそう」

マサヒロ「わっかんねえな」

エイコ「明日早いんだっけ？」

マサヒロ「うん。6時半」

エイコ「また工場？」

マサヒロ「そうそう」

エイコ「じゃねる？」

マサヒロ「そうしよっかな」

二人、布団に入る。

ゆっくりと暗くなっていく。

エイコ「今日はうまくいくかな」

マサヒロ「え、いくだろ。日本製だぜ」

エイコ「そうだね」

暗闇の中から、尊い音が聞こえてくる。

終幕